

神のうちで生きる

「使徒行伝」17章22節から31節までを朗読。

27, 28節「こうして、人々が熱心に追求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。事実、神はわれわれひとりびとりから遠く離れておいでになるのではない。28 われわれは神のうちに生き、動き、存在しているからである。あなたがたのある詩人たちも言ったように、『われわれも、確かにその子孫である』」。

この記事は、聖徒パウロが地中海各地の町々にイエス様の福音を伝えた伝道旅行の一節であります。この時テサロニケを通過してベレヤという所まで来ました。その間パウロが行く先々でユダヤ人がやって来ては彼の話妨害するといひますか、その働きを妨げようとする。この時もいろいろなトラブルが続いたようであります。それで彼は勧められてアテネへと渡って行くことになりました。16節に「さて、パウロはアテネで彼らを待っている間に、市内に偶像がおびただしくあるのを見て、心に憤りを感じた」。パウロは初めから「是非アテネの町に行こう」と決めていたわけではなかったのです。様々な事態が紛糾してやむなく、避難するかたちでアテネの町へ来ました。パウロとシラスの二人で主には行動していましたが、それ以外にもパウロに従う人たちがいました。この時はパウロ一人が案内する人に導かれてアテネに来ました。

そして残りの一行が来るのを待つという状況でした。その待っている間、彼はアテネの町の中を散策しました。そうしますと、「市内に偶像がおびただしくあるのを見て、心に憤りを感じた」のです。

今でもそうだと思いますが、当時アテネの町には偶像が飾られている。それはギリシャ神話にもみられるように、ギリシャ人たちは神話が大好きですから、そういうものを飾ります。以前アテネの町へ行きました時、結構あちらこちらに神話に基づく彫像が飾っていました。日本人に似ているようです。日本でもそういうものが沢山あります。

長野県に安曇野という風光明媚な所がありますが、ここには昔から根付いている土着信仰があり、あぜ道に行く度ごとに道祖神が祀(まつ)られています。そして、それらが全て手入れされているのです。私はそれを見て「こんなことをよくやるものだ」と思ったことがあります。そこばかりでなくて、北九州でも福岡でも、普段は気づきませんが、ちょっと注意して見ていると、そこにも祠(ほこら)があり、ここにもお地蔵さんがありというふうに、あちらこちらに飾られている。だから、そういう意味ではアテネの人々と同じであります。

パウロはびっくり仰天したのです。というのは、彼の生まれ育ちはユダヤ教ですから、偶像神を拝むことは御法度とい

いますか、大きな罪を犯すことです。ですから、そんな習慣が一切なかった。また見たこともなかったと思います。ところが、アテネに来てみて、その数の多さにびっくり仰天したのです。ですから 16 節に「心に憤りを感じた」と、大変憤慨したのです。「何だ、こんな物！」と、彼はそう思ったでしょう。ところが、アテネの町には、時間があると人が集まって、いろいろと諸説議論を戦わせることが好きでした。18 節に「エピクロス派やストア派の哲学者数人」とあります。アテネはギリシャ哲学の発祥の地でありますから、当時一般市民ですらも哲学者ぶって人の道を説き、様々な難しい話をするのが大好きでした。そこでパウロも捕まってしまう。「あまり見ない顔だから、ひとつご高説を伺いたい」と、それで皆からいろいろなことを質問される。彼もそれに答えていくと、皆が興味を持ちまして、「是非もう一度きちんとあなたの話を聞きたいから、アレオパゴスの評議所に」と、いうならば、公民館のような所でしょう、人の集まる集会場ですが、「そこに来い」というのです。それでパウロは出掛けて行きました。そこで「お前が話をせよ」と言われたのが、22 節以下です。22 節以下は、伝道メッセージであります。全くイエス・キリスト、神様のことに付いて何一つ知らない人たちに向かって話を始めたわけであります。

まずはアテネの人を褒めます。「アテネの人たちよ、あなたがたは、あらゆる点において、すこぶる宗教心に富んでおられる」。あなた方は大変まじめな、宗教心

に富んだ、行い正しい人たちであると、そういう意味で、まずアテネの人々を認める。のっけから敵対心をむき出しにすると受け入れられません。イエス様の証をしようとする時、まず聞く相手をよく見て、相手をちょっと持ち上げないと、それは一つのきっかけであります。この時パウロはそうやって「あなた方は大変宗教心に富んだ人たち、しかも町を歩いてみるといろいろな神々を飾っていて、しかも『知られない神に』と書かれている偶像もあった」と、「あなた方が知らないで拝んでいる神々がどんな方であるかわたしが教えてあげよう」と、そういうふうに進んでいきます。そこで語っているのが 24 節「この世界と、その中にある万物とを造った神は、天地の主であるのだから、手で造った宮などにはお住みにならない」。まず神を信じること、どんな宗教でもそうですが、信仰のいちばんの土台はここにあります。神を信じること、ただ神をどういう御方と信じるのか？これは全ての宗教によって違います。それこそギリシャでは、お酒の神様から太陽の神、ありとあらゆるものが神になってくる。神の支配の内に……。

日本でもそういう考え方があります。田舎の家に行きますと、あちらこちらに札が貼ってあって、かまどから、井戸の神様、トイレの神様、ある知人のお宅を訪ねて行ったことがあります。そこでトイレを借りました。壁の上を見ますと、お札が貼っている。名前がよく分からない。難しい崩し字で書いてありました。「どこの神様かしら？」と、神社の名が

横に書いてある。そんな神様の前で小用をたす、ちょっと引いてしまいます。おうちの人を大切にしている。全くキリスト教とは縁のない知人でしたから、「このお宅はこういうことをするのか」と、私も初めての体験で、パウロと同様の心境であったことを思い出します。

「知られない神に」と、名前が分からない、何の神様か分からない神様を拝んでおく。日本でも「何事のおわしますかはしらねども」と、どんな神様がいるか分からないけれども、「かたじけなさに涙こぼるる」と、ただかたじけない、有難くて涙が出てくると、案外とそういうものです。「この神様は、どんな神様か」と、分からずに拝む。鳥居があると、そこへ行ってペコッと頭を下げる人は必ずいます。だから、宗教心という意味においては非常に富んでいる。ただ残念ながら真の神様を、本当の神、畏れるべき神様、大切な神様が、どういう御方であるのか知らない。しかし全ての宗教で神様がなければ成り立たない。だからいちばん大切なのは、神様がいますこと、これに付いては全ての人に共通であります。ただその神様をどういう神様と信じるか？

そこでパウロが語った第一のことは、24 節に「この世界と、その中にある万物とを造った神は、天地の主であるのだから」と、まず信ずべき神様は、天地万物の創造の神、造り主である、このことを第一にする。これは私たちの信仰においてもそうです。信ずべき神様は、聖書の一番初め「創世記」にありますように、

まず神様が全てのものの根源、始まりであり、全てのものを創りだして下さった。神様は、ただ万物をお創りになられたという漠然とした方というよりは、「私を造って下さった」。皆さん一人ひとりを造って下さった。「私が今ここにあるのは、神様がいますからだ」と、そこまではっきりと神様を信じている。そういう信じ方をしてるかということです。案外と私たちは「そうです。万物の造り主」「何を創った？」「天を創り、地を創り、木々を創り、空の鳥、動物を創り……、」「あなたは？」「え、私は親から造られた」と。そのくらいに考えてしまうのです。それくらいに思っている。そうじゃなくて、「私が今日ここに生きている、ここに存在していること自体が、神様がいらっしゃるからです」と、はっきりと確信を持って言えるか？これが信仰の出発点です。だから、パウロはまずこのことをアテネの人々に語ったのです。

24 節に「この世界と、その中にある万物とを造った神は、天地の主であるのだから、手で造った宮などにはお住みにならない」。人の手で造った宮で、それで満足できるような、それに収まるようなちっぽけな神様じゃない。まずこのことです。だから神社仏閣をよく目にし、「ここに神様がいらっしゃるのか」と思いますが、神様よりももっと大きな家に住んでいる人は他にいくらでもいる。神様は、人の手で造られた社（やしろ）や、神社や仏殿、そういう建物の中に住むような御方ではない。

ですから25節に「また、何か不足でもしておるかのよう、人の手によって仕えられる必要もない」。もう一つは、人が神様のために何かしてあげる、その必要はないということです。神様を木で造り、石で造り、人が造った建物の中に安置して、祀って、これが神だという、そんな馬鹿げた話はない。人の手を掛けることは何一ついらない。まさにその通り、25節に「また、何か不足でもしておるかのよう、人の手によって仕えられる必要もない。神は、すべての人々に命と息と万物とを与え」、神様は、全ての人に命と全ての必要を満たして下さる。だから、私たちがここに生き、存在している、私たちが今日あることは、これはまさに神様が許して良しとして下さって、ここに存在している。だから、神様が、「人の子よ、帰れ」と私たちの終わりを決めなさったら、どんなことがあろうと、それは変わることがない。神様のご支配の中に、神様の絶大な力の下に私たちは握られているのです。

そのことをパウロはここに語ったのです。25節以下に「神は、すべての人々に命と息と万物とを与え、26 また、ひとりの人から、あらゆる民族を造り」。あの創世の初めにアダムとエバという二人の人を創って、その子孫として私たちをこの世に生きる者として下さった。私たちは全て一人の人から生まれ出てきた者、そして民族として、それぞれの民族を神様は造り、「地の全面に住ませ、それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのである」。まさに神様は、人の世

の歴史を導かれる御方です。時代を区分し、時代に応じてそれぞれの国を立て、滅ぼし、国々の境界を定め、神様が全てを成し遂げておられる。人の業ではない。私たちはそういう歴史を学ぶ時、こういう民族が力をもってきて他の民族を滅ぼし、またこの国が取って国境が変わり、こうなってああなって、国土を分割してどうのこうのという話になる。人の力でそれが決まって行くかのように思うが、それもこれも神様が定めなさったこと、神様の手に握られて行われていることです。だから「それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さる」。

27節に「こうして、人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった」。神様は、そうやって人の力ではない神様の力を現わし、あらゆるものをそこに在らしめていらっしゃる。存在させていらっしゃる神様。だから、神様を求めるならば、必ず創造の神、また人の手によらないで、全てのものご自分で全うすることのできる神、またあらゆるものをご自分の御心のままに続べ治め給う神であることに気が付くはずだと。私たちにもそのことが言われる。私たちは幸いにも神様を信じることができるように、神様はあえて選び召して下さったのです。私たちがどんな時にでもそこに神がいますことを信じる。神様によって今、このことが起こっている。神様が常に私たちと共にいること、それどころか、「事実、神はわれわれひとりびひとりから遠く離れておいでになるのではない」。神様は、私たちとは別の世界、ど

こか離れた所に神の国があって、そこに住んでいて、時々来ては私たちの生活をかき乱す、そういう神様ではありません。

気が付かないうちにそういう発想、考え方といいますか、そういう受け止め方になっています。日々の生活は自分が一生懸命にやっている。時々困ったことやつらいことがある、自分の力の足りないこと、知恵がないこと、そのためにできないことがある。だったら、ここで神様にお願ひしよう。自分の生活と神様とは常に切り離されている。神様のことは知っているし、信じてはいるが、私の生活は私のもの、私が何とかしなければ、あるいは家族で何とかしなければ、あるいはこの世の様々な仕組みや何かによって、事を進めなければならぬ。神様は特別な時、あるいは力の不足した時、頼るべきことがある時のものであって、まずは自己責任、人は自分の責任をもってすべきことがある。そうでなければ人としての値打がないと考える。それは大きな間違い、なぜなら、神様は私たちから離れて存在しているのではない。

クリスチャンでもそういう考え方をする方がいます。そういう方の話を聞きますと、信仰と自分の生活が切れている。自分の生活は自分の生活、神様のことは別である。神様は造り主であり、全能者であって、万物をご自分の御心のままに統べ治めていらっしゃる御方……、とすらすらと、立て板に水のごとく話すことができる。しかし、「じゃ、今あなたが悩んでいる問題はどうなんですか?」「いや、

これは息子がこういうことをしでかしたためにこんなふうになってしまった。あの時私がもう少し親としての役割をしておけば起こらなかったはずです」と、「で、その中に神様はいらっしゃるの?」「いや、これは神様の問題というより、私の問題です」と、「あら、そうですか?」。クリスチャンは皆、神様を信じているかと思いきや、信じていない。確かに信じている。しかし「私の問題は私がしなければいけない」。そうではないのです。「私」がそもそも神様によって造られ、神様に握られている。

そのことが「**事実、神はわれわれひとりびとりに遠く離れておいでになるのではない**」という言葉です。神様と私たちは、壁で仕切られた向こう側とこちら側にいるのではない。実は、28節にありますように「**われわれは神のうちに生き、動き、存在している**」のです。いうならば、神様の中に、「中に」という言い方は一つの譬えでありますから、神様と共にといえますか、神様のなさる一つひとつのわざの中で私たちは持ち運ばれている。そこに在らしめて頂いている。存在させられている自分である。だから、今日この集会に集うことができたことも、神様のわざであって、私たちをここまで導いて下さったのも神様である。どんなことにも、神様の御思いがあり、ご計画があり、御業があり、御力があってこうなっている。時には自分にとって不都合なこと、自分の願わないこと、あるいは自分にとってつらいこと、悲しいことであるかもしれません。人とぶつかることもあ

るでしょう。ぶつかること自体、神様の御手の中にある。

私はいつも28節のお言葉を読む度に心が軽くなります。自分で責任を持たなくて良い。神様が握っていらっしゃるので。「われわれは神のうちに生き、動き、存在している」。神様が私たちの全てのことに関わっておられる。どんなことも神様が知らないで存在するものはない。病気にしろ、家庭のことや仕事のこと、どんなことも、神様が一つひとつご計画をもって私たちに与え、私たちを通して神の力を現わしておられるのです。私たちの日々の生活の全てのことが、神のうちに置かれている。どんなにもがいても、あがいても、神様から離れるわけにはいかない。「私はそんなものは信じません」といくら否定しようと、何と言おうと、生きている限り……、生活の全ては、神様が良しとして備えて下さったのです。だから、何があっても、神様は善きことをして下さると信じる。神様に信頼することが私たちに求められることです。

ところが「信頼できないのはなぜか?」。私たちが神様を信頼できないのは罪のゆえです。自分の力、自分の考えるところ、望むところを正しいとし、それが唯一絶対ベストであると主張する思いがある。神様を認めることができない。自分の生活の隅から隅まで、嫌なこともつらいことも、悲しい出来事も、そこに神様が私を置いて下さった。世の多くの人々は不幸に遭うと、「それは罰が当たった」「神様から懲らしめられている」「神様から意

地悪されている」と言う。世の人々は「神様は確かに力ある御方だけれども、下手をするととんでもない災難に遭う」。「触らぬ神に祟(たた)りなし」、できるだけ神様は敬うけれども遠ざけて、祀り上げて普段の生活に関わらないでほしい」と言う。神様に対する考えです。その心には、神様を恐れる、怖い。「怖い」と思う時、相手を信頼はできません。怖い神様です。それに対して真の神様は「そうではない、わたしはあなた方をどんなに愛しているか」。ご愛を何としても知らせようとして下さった。それが主イエス・キリストでしょう。神様は「わたしは憐れみ豊かなもの、また恵みあふれる者である」とたびたび語っておられる。自分の人生を振り返って、誰がこんなに豊かな恵みのうちに、幸せな生涯を送らせて下さったか。どんなことを取り上げても「自分にとって当然である」と言えることはありません。むしろ望外の恵み、望みもしなかった、考えもできなかつたような道筋を私たち一人ひとりに与えて下さった。今振り返って私はしみじみそう思います。つらかったこともあります。もちろん涙したこともあります。眠られない夜も過ごしたこともあります。しかし、それもこれも今振り返ると、「本当にあれがあつて良かった」「あのことを通してこういう新しい道に導かれた」と、どんなことも神様にご愛をもって私たちを導いて下さっている。「私を顧みて下さっていらっしゃる」と言えるのは、十字架の主を見上げる時、イエス様が、神の御子である御方、神ご自身が人となり、この世に降り、私たちの罪のあがないとなつて下さった。

そんなにまで私を愛して下さった神様が、どうして私たちにへまなことを、苦しい目に遭わせて、それで良しとするはずがない。「どこまで神様に信頼するのか?」。神様をどれほど信じているのか?徹底して神様の中に自分を委ねきってしまう。つらいことがあろうと、苦しいことがあろうと、「**死の陰の谷を歩むとも、わざわいを恐れませんか。あなたがわたしと共におられるからです**」(詩篇 23:4)と信じる。

私たちは「神の中に生き、動き、存在している」。しかもその神様は「私たち一人ひとりを限りない愛をもって愛している」と言われる。だったら、今受けている問題、苦しいと思うこと、つらいと思うことも、また感謝して受ければ良いのです。神様はそこからどんな道でも拓(ひら)いてくださるのです。自分の思い通り、自分の考えたように、自分が計画したように事が進んでほしい。果たしてそれが幸せかどうか分からない。私たちを造り給うた神様は、一人ひとりに幸いな恵みの道を備えて下さる。常に私たちは、「今日も神様の中に生かされ、神様の御手の中に握られている」と自覚する。しかも、握って下さる神様は、ご愛をもって顧みて下さっている。信頼しようではありませんか。そうすると、自分であれこれ悩む必要がない。「次は神様、何をして下さいますか?」と待てばいいのですから。いつまでもこの状態が続くようについ錯覚します。「このまま死ぬまで続くか。俺の人生は無駄だ」。そうではない。神様は瞬時にしてどんなことでもひっくり返しなさいます。私たちが成し得ることは、徹底して、とことん神様を信頼し続けて、

どんなことにも「ここにも神様の御手があり、わざがあります」と、神様に自分をささげてしまう、これが「われわれは神のうちに生き、動き、存在している」ということです。どんなにあがいてみても、神様の御手から逃れることはできないのです。

「詩篇」139篇7節から10節まで朗読。

孫悟空がお釈迦様の手のひらで逃げ出してやろうと思って、どんどん飛んで行った先に大きな壁のような物がある。そこに孫悟空が「われここまで来たり」と書いた。これでお釈迦様から逃れたと思った。ところが、それはお釈迦様の中指だったという話があります。私も子供の頃母から聞かされたので、不正確かもしれませんが。まさに神様はそういう御方です。7節に「わたしはどこへ行って、あなたのみたまを離れましょうか。わたしはどこへ行って、あなたのみ前をのがれましょうか」。神様なんかいない所に行きたい。「私はもう神様と縁を切りたい。あちらに行こうか、こちらに行こうか」と、どこへ行こうと私たちは決して神様の中から飛び出せないのです。どうぞ、諦めていただきたい。覚悟を決めて……。こうなると神様と心中するしかないですね。共に行き着くまで……。8節に「**わたしが天にのぼっても、あなたはそこにおられます。わたしが陰府に床を設けても、あなたはそこにおられます**」。天にのぼろうと地の下深く陰府にまで下ろうと、そこに神様がちゃんと愛の御手、「下には永遠の腕がある」(申命記 33:27)と、私たちを

つかんでおられる。「私はこんなことをしたから神様から捨てられた、神様から嫌われた」と思いがちですが、そうではない、神様はどんな状況の中にあろうと、私たちがどんな者であろうと、握って離さない。だったらこの神様に全面的に信頼して、委ねようではありませんか。しかもご愛をもって私たちを顧みて下さる。

ところが、多くの人々は、神様の御手の中にありながら自分の周りに壁を造って、神様の光を閉ざして、「暗い、暗い、本当にこの世の中は暗い」と嘆いている。なぜ暗い？神様は光であって暗くはない。神様の御手の中にありながら、自分が勝手に、罪のゆえに、自分を神様から隠してしまおうとする。神様は決して見えないわけじゃない。見ていらっしゃるので。アダムとエバが茂みに隠れた時、神様は「あなたはどこにいるのか」と尋ねられましたが、はっきりと知っていらっしゃる。私たちは勝手にあれこれと、神様を限って、神様の光を遮って、失望の闇の中に、心配の不安の中に自分を追い込んでいるのではないのでしょうか。早くその罪を、「覆いを取りのけなさい」。罪の覆いを取り除くのは十字架による以外にありません。主に、キリストに心を向けて、主に悔い改めて、「神様、こんな者ですが、あなたが握って下さるなら、全てをお委ねします、感謝します」と、神様の御手にはっきりと自分を委ねて行きたい。10 節に「あなたのみ手はその所でわたしを導き、あなたの右のみ手はわたしをささえられます」。神様は、私たちがどんな所に逃げ出そうとも、そこにちゃ

んと御手を据えて、私たちを待ち受けて下さる。神様に自分を捨てて、信頼する。「今ここにも、神様がわざを進めておられる」と確信する。

讚美歌 90 番に「ここもかみにのみくになれば」と歌います。「ここも」とは、ここ、今この所。皆さんが遣わされて行く家庭であり、職場であり、地域であり、そこに神様がおられる、神の国がある。それどころか、私たちは神と共にある。神様は、ご自分の御心に従って、常に全てのことを持ち運んでくださる。

「使徒行伝」17 章 28 節に「われわれは神のうちに生き、動き、存在しているからである」。神様は身近にといいですか、常に私たちと共にいて下さる。私たちを握って離さない。こんな幸いな恵みをもって、神様は私たちを顧みていて下さるのでありますから、主の御手にくつろいで、心から信頼して、どんなことがあっても委ねて行こうではありませんか。主が「せよ」とおっしゃることがあるなら、喜んでさせてもらえばいい。主が「やめよ」と言われるなら、たとえ事の半ばであっても、そこでやめればいい。どんなことがあっても神様のご愛の道が常にあること、神様と共にあることを絶えず繰り返し信じ続けて行きましょう。

ご一緒にお祈りをいたしましょう。